【レポート】

版画家海野光弘の制作活動をふりかえる

主任学芸員　朝比奈太郎

1. はじめに

海野光弘は中学生の頃から版画制作に取り組むようになり、家業を継いで染色業を営む。一方で、静岡県が版画制作が盛んだった時期に版画制作、版画の普及など多方面で活動し、中川雄太郎、小川龍彦(たつひこ)、伊藤勉黄(べんおう)、前田守一(もりかず)などの版画家たちに継ぐ若手として将来を嘱望されながらも 39 歳の若さで急逝した。

10 代から 20 代後半にかけては、日常生活、社会問題、自然など様々なテーマを取り上げて版画を制作した。20 代後半から逝去するまでの約 10 年間は「古民家」を題材に日本各地を訪れて、その地域の古民家を描いた作品を精力的に作っている。その海野光弘の版画の制作活動を振り返ることで、彼が版画に込めた想いを考えてみる。

2. 中学生時代～版画制作活動の黎明期

海野は昭和 14(1939)年 11 月、静岡市で誕生した。生家は染色業を営んでおり、海野光弘が少年時代から創作に関心を抱くことに影響を与えたと推測される。

島田市博物館に収蔵されている海野の木版画作品の中で制作年月が最も古い作品(制作月が不明確なものは除く)は、昭和 27(1952)年 11 月に制作した「孫と老人」(図版1)である。この作品は美術教育関係者の間で高い評価を受けたが、制作した半年後には、海野自身は技術が未熟だという感想を抱くようになっていた。このことは海野が、中学生時代から版画技術の向上に熱心だったことを物語るエピソードといえるだろう。

海野が、本格的に版画制作に取り組む契機となったのは、昭和 27 年 12 月から翌昭和 28(1953)年 1 月にかけて、冬休みの自由研究として制作した「版画日記」(図版2)である。これは日記のイラストとしてマッチ箱大の版画を彫り、スタンプのように押したものだが、この版画日記がクラス担任を介して、版画を通じて子どもたちの感性を伸ばそうとする運動を実践していた教師・蒔田晋治(しんじ)と出会うこととなる。時に海野光弘 14 歳、蒔田との出会いへとつながった「版画日記」が、版画制作活動の実質的な第1歩と考えられる。また、海野と蒔田の仲介役を務めた教師は、海野を「私たちの感じないことを考えているような子供」と語り、温かく見守りながら、時には間接的なアドバイスをしたようである。

昭和 28 年夏、蒔田は高校受験を控えて 1 年以上も版画から離れることになる海野に、「高校進学後に版画制作を再開してもらいたい」という思いを込めて、長野県岡谷市で開催される「全国版画教育研究大会」に誘う。小中学校の教師 1,000 人以上が集う児童版画教育の大会で、刺激を受けた海野は、中学校の卒業記念として「朝鮮部落」17 点の制作に取り組む。この「朝鮮部落」では、1 枚 1 枚テーマによって表現方法を変えている。三角刀による力強く激しい線を追究した「孫の手を引いて」(図版3)、鉄筆を使ってスリガラスを表現した「夜、老人の話に聞き入る」(図版4)、釘やネジを金槌で叩いて傾きかけている建物を表現したりするなど、中学生時代にすでに独創的な表現方法と、「デッサンと下絵に時間をかける終生の自分のものとなる方法」を実行している。

3. 高校生時代～多色刷りへの初挑戦

昭和 30(1955)年、静岡商業高校に進学した海野光弘は、5 月～8 月下旬にかけて「蛙天国」(写真5)をはじめとする個人版画集「かえる」を制作する。

かねてからかえるに強い関心を抱いていた海野光弘は、学校が終わると、田に通って日没までかえるをスケッチし、構図を考え、版木を彫り、作品を刷り上げるまでに 150 時間余を費やした全工程を 1 人で行い、多色刷りを試みるなど、意欲的に様々な挑戦をした。この「かえる」シリーズも評判となり、昭和 31(1956)年には蒔田晋治著『版画に見る少年期』で海野少年を紹介された。翌昭和 32(1957)年には NHK テレビに出演して「かえる」について語っている。当時一高校生が NHK の番組に出演する事は異例であった。

「かえる」は高校時代のほぼ唯一の版画集となったが、蒔田先生の応援もあって、海野光弘の名は版画家たちの間で知られるようになり、労働者を題材にした版画を制作していた上野誠の知遇を得たのも、高校生時代である。

4. 日立製作所時代～1 年間の東京時代

昭和 33(1958)年、静岡商業高校を卒業した海野は、日立製作所に入所する。東京では、一時期美術研究所へ通ってデッサンを習ったり、多くの版画たちと交流をもったり、版画家・上野誠の影響が見られる「言問橋」3 部作などを制作している。

東京で数年を過ごし、様々な経験を積んで、自らを高めることを望んでいたが、生家の事情により、1 年で日立製作所を退職し、静岡へ戻った。この時、

同期入社した 1 人 1 人にメッセージを添えた手作りの湯呑みを制作し贈っている。

5. 苦悩の時期～1959 年頃―1966 年頃

昭和 34(1959)年頃から、作品に変化が見られるようになる。「水郷の子等」図版6)、「老婆」など日常的な人を描いた作品を制作する一方で、「ひとりぽっち」、「青春」、「夕やけ」(図版7)など哀愁を感じさせる作品が現れるようになる。それは家業を継いだものの、染色と営業を兼ねる日々が次第にのし掛かり、また自らの版画の進む方向に迷う心境の反映だったのであろう。昭和 36(1961)年、空を見上げたり、うつむき加減の3人の少年を描いた作品（無題）以降、約2年間創作活動は空白期となる。

そして昭和 38(1963)年、版画制作を再開するために静岡県版画協会への出品を決意する。しかし、締め切り日の前日夕刻になっても、作品の構図さえ白紙のままで、家族の叱咤を受けて徹夜で「壁」(図版8)を制作し、同年 11 月に「壁」で静岡県版画協会に初入賞する。翌昭和 39(1964)年には「触」が静岡県版画協会展で日本版画協会奨励賞を受賞する。

しかし、海野の苦悩は次第に深刻さを増し、昭和 40（1965）11 月に制作した「裂像」(写真9)は、人体を縦に裂くような亀裂が走っている。海野の苦しみを見かねた家族の勧めで、昭和 41(1966)年1月に訪れた静岡市宇津ノ谷の素朴な景観に接し、今一度版画家としての原点に戻ることを静かに表明したという。早速翌2月宇津ノ谷を題材にした小作品 5 点を制作、さらに同年3月「蘇像」(写真 11)を制作する。なお、宇津谷を題材にした小作品の1点「軒下日和」(図版 10)に惹かれたか、この作品を大型化した作品も制作している。以後、同様の手法をもって大作、傑作が生みだされていくことになる。

、昭和 41 年から約3年にわたって宇津ノ谷を題材にした作品を 20 点以上制作し、同年には静岡市民展で「障子戸」が奨励賞を受賞する。また「モノローグ宇津谷」や「幼な日々」のように、少女をテーマにした作品も手掛けている。

昭和 42(1967)年に制作したテトラポット3部作や「すすきと廃船」(写真 12)では風景を大胆に抽象化して表現したり、昭和 43(1968)年制作の「残像」（写真 13）など白いシルエットでコマ送りのように登場人物の動きを示したりするなど、新たな挑戦を試みている。また、この頃から伊豆や浜松など静岡県各地を訪れているのも注目に値する。

6. 古民家のある風景（1）～1969－1973 年

昭和 44（1969）年、海野光弘は、山梨県忍野村で初めて県外を題材にした小作品集を制作する。タイトルを含めて6点(忍野を題材にした作品は 10 点以上制作している)と点数は少ないが、影絵風の作品「樹間」(図版 14)や白いシルエットの表現を取り入れた「葉音」など、抽象的な要素を活用したシリーズとなった。

昭和 45(1970)年、富山県相倉の合掌集落に取材した作品集を制作する。相倉は同年に国指定史跡に指定され、平成7(1995)年には世界文化遺産として登録された。海野光弘は相倉を 2 度訪れ、夏から秋にかけての時期と冬景色を描いている。このシリーズはサブタイトルにもあるように「人・花・合掌」をテーマにしており、自らの原点を見据えつつ、本格的に古民家を題材にしていると推測される。このシリーズの「窓辺」（図版 15)は暗い家の中から明るい外を見る視点で描かれているが、この視点はたびたび登場する。

昭和 46(1971)年、「会津大内」は福島県の旧街道に残る宿場と人をテーマにしたシリーズで、「軒干し」、「月影」(図版 16)のように、より茅葺屋根の古民家の存在感が大きくなっている。同年、版画家を志す人たちにとっての憧れである、東京銀座の養清堂画廊で個展を開く。

昭和 47(1972)年、青森県下北半島を題材にしたシリーズを制作している。このシリーズでは、かつて漁業で栄えた歴史を背景に朽ちていく納屋や人影もまばらな海辺、霊場として名高い恐山などを題材にした作品が目をひく。 なお、同年に青森県の他にも長野県（塩尻市・岡谷市）や愛知県（渥美半島）にも取材旅行に訪れ、数点の作品を制作している。

昭和 48(1973)年、宮城県七ヶ宿に取材したシリーズと、長野県(更埴市・現千曲市)を題材にした作品2点を制作する。作品集「七ヶ宿」は、昭和 46(1971)年に旅した会津大内(福島県)と似た旧街道沿いの集落を題材としているが、このシリーズは「人・道・古民家」をテーマとしており、道を白く簡略化して表現することで、古民家や人の存在を際立たせている。

昭和 45(1970)～昭和 48(1973)年、すなわち五箇相ノ倉（「相倉」が一般的だが、シリーズ名は「相ノ倉」)、会津大内、七ヶ宿の各シリーズは、海野光弘の中で茅葺屋根の古民家の佇まいと人が大きなウェイトを占めることが多い時期であったと言えるのではないだろうか。

7. 古民家のある風景（2）～1974－1978 年

昭和 49(1974)年、三度長野県（鬼無里）を訪れた後、日本最西端の地である沖縄県与那国島、竹富

島を巡っている(当初の計画では西表島も取材する予定だったが、交通事情等の関係で断念している)。

与那国島を題材にした作品集では、茅葺屋根が描かれた作品は少なく、「島の家並」(図版 17)、「珊瑚礁の海へ」、「ふれ太鼓」など当時同島でも多く見られた赤い瓦屋根の家(現在では建て替えが進み、一部でしか見られない)や自然、与那国島独特の衣装など、風俗にスポットを当てているように思われる。

昭和 50(1975)年に訪れた九州屈指の米所である白石平野(佐賀県)では、佐賀県独特の「くど造り」(「くど」はカマドの事。正面から見ると民家がカマドのように見える事に由来する)の古民家がある田園を描いており、「くど晴れ」(図版 18)、「小憩い」など古民家を主題にした作品と、「平野の彼方へ」(図版 19)、「夏風」のように古民家のある田園風景を描いた作品に大別されると考える。白石平野を題材にした作品の中からは、海野光弘の版画作品の中でも傑作と誉れ高い「縁通し」、「追い陽」(図版 20)が誕生している。

特に 「縁通し」は、スイス・ジュネーブ市にあるプティパレ美術館で特別賞を受賞し、同美術館から招待を受けている。残念ながらスイス訪問は、私的な事情で実現しなかったが、もし海野光弘が渡欧していたならば、スイスの景観に感銘を受けて、どのような作品を制作したのだろうか、という関心は尽きない。

昭和 51(1976)年には山形県田麦俣を訪れ、山峡の地に豪壮な多層民家が建ち並ぶ独特の景観を描いている。このシリーズでは「山里に咲く」、「風雪の里」のように、視点を多層民家に近づけて大胆にカットして描いている作品が多い。また、この年には早春の長野県白馬(1974 年に訪れた鬼無里の近隣地域)を訪れて、「残照の白馬」、「雪映えの白馬」2点を制作している。

昭和 52(1977)年は愛媛県外泊を訪れている。それまでスケッチした地域とは違い、海からふく強風を防ぐための石垣がそびえる瓦屋根の集落、その間を細い道が縦横に走る景観を題材としている。外泊は江戸時代後期から明治初期の間に集落が作られた、比較的歴史の浅い集落である。ここでは「軒間」や「潮風」(写真 21)、「斜景」(写真 22)など垣間見える海を描いたり、集落も背後の山々も思い切って簡略化したタッチで表現したりしている。

外泊の人々が海野光弘版画記念館を訪れた際、「外泊を訪れる芸術家は多いが、石垣を細部に至るまで再現する作家は稀だ(外泊集落のどこに立って、どちらを見ているのかが分かると口々に語っていた)」、と感嘆していた。

同年には岩手県(遠野)も訪れて「霧雨」、「霧雨の遠野」を制作している。

昭和 53(1978)年には、阿仁・根子(秋田県)と再び白馬(長野県)をスケッチ旅行で訪れている。マタギ発祥の地といわれる阿仁・根子では、姿を消しつつあるマタギと古民家を重ねてみているのではないか、と思われる。同じ方向を見ながら、床に近い視点から見たり、天井から見下ろすような連作「語らいの前」(図版 23)・「語らいを終えて」(図版 24)が制作されている。「語らいを終えて」は、海野光弘の絶筆となった作品でもある。また長野県も訪れて冬の白馬を描いている。海野氏の手記によると、この時の旅行では、降雪に悩まされたと記されている。

1970 年代半ばから後半にかけて制作したシリーズは概して古民家のある風景をテーマにしている、つまり地域の人々が暮らす風景の中に古民家もある、という視点に変わってきたと考えられる。

9. 新たな挑戦―1979 年

昭和 54(1979)年、「ことしは脱民家、脱カヤブキ屋根で行こう。画面に絵画表現のロマンを入れたい。この作品をみたら、うれしくて悲しくなるような。その為にもジックリ描こう あせるなかれ」とメモを記して、7～8月にかけて坊津(鹿児島県)を旅した海野光弘だが、翌9月に脳出血のために39歳で逝去した。坊津シリーズは「路地裏」(図版 24)、「港晴れて」(図版 25)など4点が制作途中で未完となったため、海野光弘がいかなる境地を目指して新しい1歩を踏み出そうとしていたのかは、想像するよりほかはない。

坊津の景観を描いたスケッチや、各地へのスケッチ旅行への過程から考えて、与那国島や白石平野を題材にした作品集から手掛け始めた、古民家のある風景をさらに発展させながら、今一度原点に立ち返り、日々の暮らしの様子を通じて人間希求をさらに深めていこうとしたのではないかと考える。

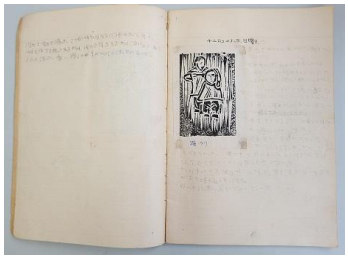
10. まとめにかえて

海野光弘は、家業を継いだ後は染色業を堅実に行いつつ、余裕のできる時間を有効に活用して各地にスケッチ旅行に赴き、30 年に満たない版画家人生の中で 300 点余の版画を制作している。また「らくはん会」を結成して、版画の楽しさを広めようとする活動も積極的に行っている。何事にも頑張る人だったからこそ、太く短く生きてしまったのだろう、という意見を拝聴したこともある。

「この一生を版画で豊かにしていきたいと思う。」中学生の時に記した言葉を、海野光弘は人生を通して実践したと言っても、過言ではあるまい。

【参考文献】
・蒔田晋治著『版画にみる少年期』1956
・蒔田晋治編著『生命(いのち)を彫った少年　海野光弘となかまたち』1993
・海野光弘版画全作品集刊行委員会編『海野光弘版画全作品集』1993
・海野光弘版画作品刊行会編集・制作『館蔵品目録・海野光弘の木版画作品Ⅰ　四季・春』2000
・海野光弘版画作品刊行会編集・制作『館蔵品目録・海野光弘の木版画作品Ⅱ　四季・夏』2000
・海野光弘版画作品刊行会編集・制作『館蔵品目録・海野光弘の木版画作品Ⅲ　四季・秋』2000
・海野光弘版画作品刊行会編集・制作『館蔵品目録・海野光弘の木版画作品Ⅳ　四季・冬』2000
・海野光弘版画作品刊行会編集『海野光弘・木版画の世界Ⅰ－絵になる前－』2000
・岩崎芳生『評伝　海野光弘　風と光の旅立ち』2012
・青木亮人『愛媛　文学の面影　南予編』2022

図版1.「孫と老人」
（1952 年）



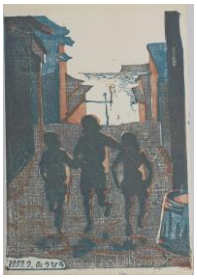
図版2. 版画日記
（1952年）

図版 3.「孫の手を引いて」
（版画集「朝鮮部落」・1954 年）

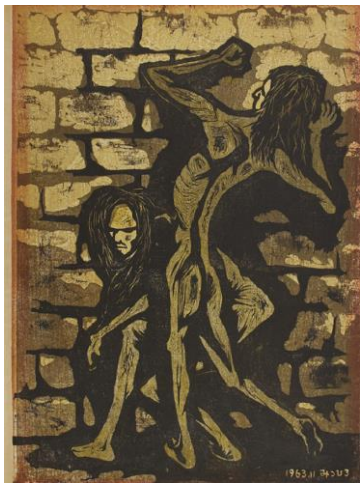
図版4.「夜、老人の話に聞き入る」
（版画集「朝鮮部落」・1954 年）

図版5.「蛙天国」
（版画集「かえる」・1957 年）

図版6.「水郷の子等」(1959 年)



図版7.「夕やけ」(1959 年)



図版8.「壁」(1963 年)

図版9.「裂像」
(1965 年)

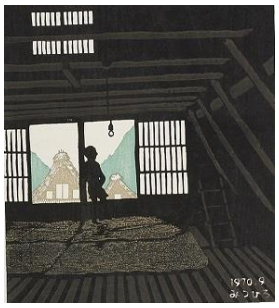
図版 10.「軒下日和」
(1966 年)

図版 11.「蘇像」
(1966 年)

図版 12.「すすきと廃船」
(1967 年)

図版.13「残像」(1968 年)

図版 14.「樹間」
(版画小品集「忍野」・1969 年)

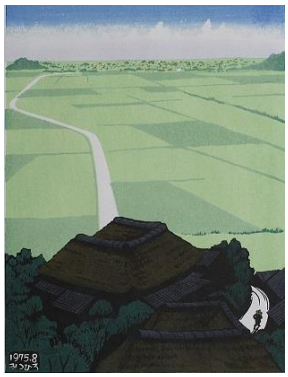


図版 15.「窓辺」
(版画小品集「五箇相倉」・1970 年)

図版 16.「月影」
(版画小品集「会津大内」・1971 年)

図版 17.「島の家並」
(版画小品集「与那国」・1974 年)

図版 18.「くど晴れ」
(版画小品集「佐賀・白石平野」・1975 年)



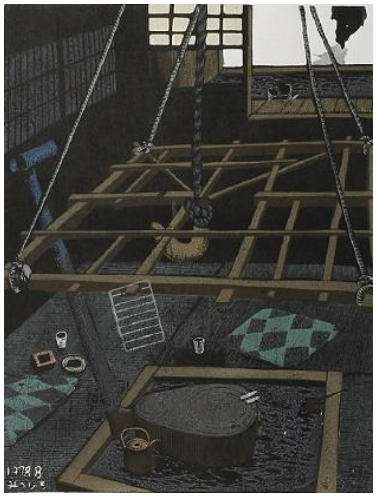
図版 19.「平野の彼方へ」
(版画小品集「佐賀・白石平野」・1975 年)

図版 20.「追い陽」(1976 年)

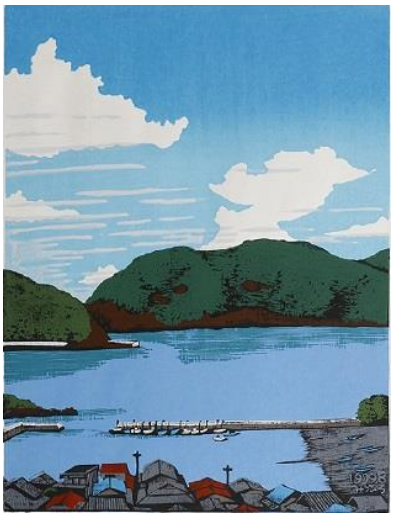
図版 21.「潮風」(版画小品集「外泊」・1977 年)

図版 22.「斜景」(1977 年)

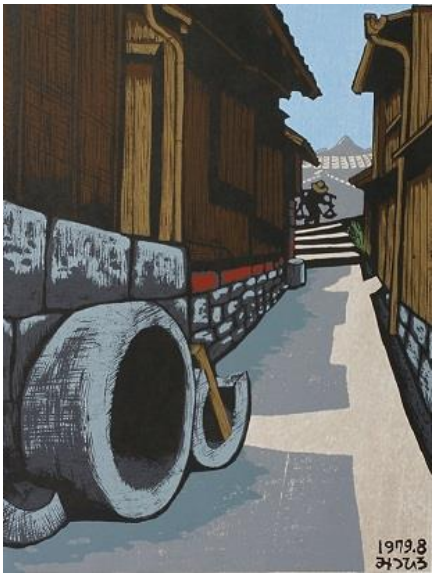
図版 23.「語らいの前」
(版画小品集「阿仁・根子」・1979 年)



図版 24.「語らいを終えて」
（1979 年）



図版 26.「港晴れて」（1979 年）
※「坊津」シリーズ＝未完



図版 25.「路地裏」
（版画小品集「坊津」・1979 年）
※「坊津」シリーズ＝未完